



第44回全国選抜高校テニス大会 大会レポート



全国高等学校体育連盟テニス専門部
常任委員 宮島 浩

《昨年に続きコロナ禍で実施》

今回の第44回大会は、昨年に引き続き、感染予防に細心の注意を払いながらの開催となった。健康情報管理システム(HeaLo)を導入し、選手と観戦者のゾーニングなど、昨年以上の感染対策を心がけた。大会に関わる全ての皆さんのが運営側の方針にご理解、ご協力いただき、本大会が無事開催できたことに感謝したい。



《オンライン開会式》3月20日（日）

選手同士の接触をなるべく避けるため、開会式はオンラインでの開催となった。

愛媛県立松山東高校の金浦正宗選手、長野県松本県ヶ丘高校の柳澤柚希選手の選手宣誓からスタートした。

「宣誓 私たちは日々努力を重ね、互いに高め合ってきた高校テニス選手の代表として、今ここに立っています。この大会は、コロナにより、人との距離が遠ざかってしまっている今の世の中に、試合を通して心のつながりの大切さを示す場です。」



世界は混乱し、不安を抱えながら過ごす人が大勢いる中で、この大会を開催していただけにあたり、ご尽力いただいた大会関係者の皆様、支えてくださった方々に感謝をすると共に、世界が平和になることを祈り、勇気と希望を届けられるよう最後の瞬間まで諦めずにプレーすることを誓います。」

両選手は、コロナ禍において大会開催に向けて尽力いただいた全ての人への感謝と世界平和を祈り、声高らかに宣言した。次に、古賀賢大会会長、日本テニス協会の福井烈専務理事からご挨拶を頂戴した。





《団体戦》 3月21日（月）～25日（金）

男子はシード校である相生学院（兵庫） [1]、湘南工大附属（神奈川） [5]、大分舞鶴（大分）[6-7]、北陸（福井） [6-7] が4強入りを果たした。その中から勝ち上がり決勝へと進んだのは、3連覇を狙う本命の相生学院と春夏通じて初の全国大会決勝の大分舞鶴の対戦となった。

相生学院は予選から1試合も落とすことなく、決勝戦も3勝0敗で勝利し、3年連続5度目の優勝を果たした。



男子団体優勝 相生学院高校の優勝コメント

大会関係者の皆様、コロナ禍で大変な中、感染対策を万全にして開催していただきありがとうございました。



緊張した中での試合でしたが、自分たちのやるべきことを決め、日ごろの成果を発揮して掴み取れた優勝だと思います。これに満足せず、これからも日々練習に取り組み、インターハイも優勝を目指します！

相生学院高校 主将 唐津裕貴



女子はシード校である浦和麗明（埼玉） [1]、松商学園（長野） [5-6]、野田学園（山口） [3]、第一薬科（福岡） [2] が4強入りを果たした。その中から勝ち上がり決勝へと進んだのは、前年度優勝の四日市商業、第1シードの浦和麗明などの強豪校を倒した松商学園。もう1校は第2シード、地元福岡代表の第一薬科を制した野田学園。



この2校の決勝戦は、松商学園のダブルス1がストレートで、シングルス2が接戦をものにして2勝を先行し、シングルス1も1セット目を先取し、そのまま勝ち切るかと思われたが、野田学園シングルス1、ダブルス2の逆転勝利で2勝2敗と並んだ。

勝敗を委ねられたシングルス3はファイナルセットとなり、野田学園の3-1リード。野田学園の逆転勝利かと思われたが、そこから徐々に調子を取り戻した松商学園が、5ゲームを連取して劇的な優勝を飾った。



女子団体優勝 松商学園高校の優勝コメント

『今回の選抜を終えて』

このような状況の中、大会を開催していただき、本当にありがとうございました。毎日私たちを指導していただき、博多に来ても練習環境を整えていただいた先生方をはじめ、いつも陰ながらサポートしていただいている保護者の皆様には感謝してもしきれません。

コロナ禍で練習に規制がかかり、思うように練習ができなかった時期もありましたが、みんな高い意識を持って、各自でトレーニングに取り組みました。

3位だった昨年のリベンジを兼ねて挑んだ今大会では、どの試合も非常に厳しい戦いでしたが、松商学園テニス部の強みである「チームワーク」と「明るさ」を存分に発揮し、勝利することができました。そして、チーム全員が互いに助け合い信頼し合って掴み取った初優勝は私たちにとって大きな経験となりました。この経験を活かし、次の大会でも優勝を目指して頑張りたいと思います。

松商学園高校 主将 砂田未樹



《個人戦 男子》

例年通り、団体戦の登録No.1選手による個人戦が、予選は春日公園、本戦は博多の森で行われた。男子のベスト6は団体戦決勝の三城貴雅（相生学院）、高妻蘭丸（大分舞鶴）、団体ベスト4の大沼広季（北陸）、石井凌馬（湘南工大附属）、本戦勝ち上がりの森田阜介（柳川）、中西康輔（岡山理大附属）。団体戦無敗の三城（相生学院）が本命と思われたが、決勝は本戦勝ち上がりの2名、森田阜介（柳川）が中西康輔（岡山理大附属）を6-3 6-4で下し、USオープン・ジュニアの出場権を獲得した。



男子個人戦優勝 柳川高校 森田阜介選手のウイナーズスピーチ

先ず、コロナ禍の中、大会を開催してくれた関係者の皆様、ありがとうございました。そして今日応援に来てくれた保護者の皆様、チームのみんな、応援してくれてありがとうございました。

僕は全国大会の舞台で決勝へ行くのは、今日で 5 回目なんんですけど、今まで一回も優勝したことがなかったので、とてもうれしいです。

US Open でもこのチャンスを生かして頑張ってきます。
ありがとうございました。



《個人戦 女子》



女子のベスト 6 は団体戦決勝の砂田未樹（松商学園）、長谷川晴佳（野田学園）、団体戦ベスト 4 の宮原千佳（第一葉科）、小高未織（浦和麗明）、本戦 2R から門脇優夏（西宮甲英）、里 菜央（相生学院）。決勝は前日まで団体戦を戦った長谷川晴佳（野田学園）と、本戦 3 試合を勝ち上がった門脇優夏（西宮甲英）の初の顔合わせとなった。

2 セットとも門脇がブレークを先行したが、終盤まで追い越され、6-4 6-4 で長谷川晴佳（野田学園）が門脇優夏（西宮甲英）を制し、US オープン・ジュニアの出場権を獲得した。

女子個人戦優勝 野田学園高校 長谷川晴佳選手のウイナーズスピーチ

先ず、この大会を厳しいコロナ禍の状況で開いてくださった、主催者の皆様、関係者の皆様本当にありがとうございます。そして、試合をやりやすく、気持ちよくさせてくださったレフェリーの方々本当にありがとうございます。



団体戦でチームを引っ張ってくださった監督、そしてメンバーの皆さん、本当に応援ありがとうございました。皆さんのおかげでここまで勝てたし、応援があってこそ試合をここまで進めることができました。本当にありがとうございます。

野田学園に行くと話した時に、笑顔で送り出してくれた両親、いつもサポートをしてくれて本当にありがとうございます。

この大会までは、とても苦しいこと、辛いことがありましたが、このような結果を収めることができ、今までの努力は無駄じゃなかったこと、そして、諦めずに最後まで自

分を信じ切れたことが本当に良かったと思います。今大会では貴重な経験ができたし、たくさんのこと学ばせて頂きました。これから、US Open やインターハイ、たくさんの大会がまだまだ続きますが、これからも頑張るので応援よろしくお願ひいたします。

今回は本当にありがとうございました。





《古賀会長挨拶から》

全国の高校テニス部員の夢の舞台であるこの選抜大会は、素晴らしい大会になりました。去年の夏 US Open 行にかけてもらった時、心の底から感じたことがあって、アジアが熱いと思った。特にジュニアの選手の活躍が凄まじい。この大会の個人戦優勝者は、優勝できると本気で思っている。だから本気で勝ちに行く。

この大会から US Open 出ることが目的ではなく、優勝することが目的となる大会に成長させたいと思っている。チャンスを得た 2 名には、そんな気持ちで臨んでほしい。

また、この大会はたくさんの企業の方からご支援いただいております。おかげさまで、こうして華々しくこの大会が開催され、多くのメディアにも取り上げていただきました。



「選抜」といえば福岡で行われている「テニスの選抜大会」を思い浮かべてもらえるように、いろいろな方の力を借りて、さらに注目される大会に成長させたいと思っている。

《終わりに》

コロナ禍になって久しく、様々なイベントが延期になったり中止になったりしている昨今。その影響で多くの大会が中止となり、やり切れない思いを抱える選手を数多く見てきた。そんな中でも、先生方は選手のために、何とか大会を開催したい、安全に練習できる環境を整えたいと、力を尽くした。

もちろん大会開催を危ぶむ声もあったが、選手たちにとっては二度とない、この選抜大会。選手それぞれの素晴らしい姿勢を目の当たりにして、やりきってよかったと、心から思った。

次年度の大会は、多くの観客と大きな歓声に包まれた環境の中で、選手たちが全力で試合に挑めるような世の中になっていることを願って止まない。



